



●Tackle Guide
ある程度のおマツリや糸ヨレは避けられないので、修復できるように、あらかじめハリを結んだ予備ハリを用意しておく。

冬本番を迎えるこの時期、着目されるターゲットのひとつがキンメ、クロムツ(ムツ)といった深海系の根魚だ。ひとくちに深海釣りといっても各地域によって水深やタックルの仕様は様々だが、今回はライトなタックルで楽しめる相模湾小田原早川港出船の根魚五目乗合をリサーチに向かった。

当地で根魚五目の看板を掲げる船宿の1軒、平安丸を訪れたのは11月中旬。

平安丸の受付システムは、まずは店先のテーブルに置かれた座席表に名前を記入してから受付を済ませ、駐車札を受け取り、船着き場へ移動する流れ。大おかみさん若おかみさんの明るく分かりやすい案内は、初めて訪れる方でも戸惑うことなく乗船できるはずだ。



▲早朝はキンメの群れが浮くことも多いので、指示ダナのアナウンスを聞き逃さないように
▼小田原や真鶴の街並みが見える近場で深海釣りが楽しめる

当日の根魚五目船はスポット出船だったが、待ちわびたファンへの反応は早く、定員となる12名の釣り人で満船。私は撮影に専念すべくカメラとお弁当を持って乗船させていただいた。

小田原沖は港を出てすぐ水深200メートル以上の深海に達する急深な地形となっており、古くからキンメ、クロムツを主体とする深海の根魚五目釣りが親しまれている。

当地の根魚五目の特徴はタックルの軽さにある。現在のようタックルも発展してい

オモリ150号の道具立て

なかった時代、ヤリイカ&スルメイカ用、ビシアジタックルなどをそのまま流用したのが始まり。

道糸はテトロンからPEにリールも手巻きから電動が主流となった現在だが、オモリ150号という軽量スタイルは今も変わらず、手軽な深海釣りを楽しませてくれている。

現在のタックルについて、

▼いい群れに当たると多点掛けも



「近場でスタート」
皆さんタックルのセットを完了したところで5時半に出船となった。

港を出てゆっくりと西方へ15分ほど航行した付近で、魚探リサーチが開始される。

皆さんエサを付けたハリを船べりに並べ終え、準備が整ったところで、「ハイッ、1番!」とミヨシから順番に投入。

船は微速で後進しながら、2番、3番と投入アナウンスが続き、全員の仕掛けが投げられたところで仕掛け全体の中心にくるよう前進する。

「水深は180メートルです。オモリが底に着いたら5メートルくらい上げておいて」

ほどなくしてあちらこちらにシグナル到来。10分ほど流したところで、「前から上げましょう。前の人30、50メートル巻き上げたところで、次の人が巻き上げを開始してください」

ミヨシの人から順に仕掛けが上がり始める。海中で白っぽく見えてきた魚影が海面に近づくとつれパールのピンクに変わってくる。シグナルの送り主はキンメだ。

右トモ2番の佐藤さんは5点掛け、左胴の間の宮川さんは4点掛けでキンメを取り込んだ。

大半の人が2、3枚で型は30センチ前後が主体。釣り上げた皆さんの表情が自然とほ

に包まれながら、着々と流し変えが繰り返される。次に移動した真鶴沖でも水深250、290メートルの範囲を狙い、クロムツ主体にポツポツとアタリが出る。

アタリがきたときの仕掛けの操作について船長に何うと、「比較的平坦なところならそのままキープ。カケ上がったところならアタリのたびに1、5メートルずつ巻き上げていくのが基本ですけど、迷ったら遠慮せず船長に聞いてください」とのこと。

さて、ここではいい感じでクロムツがアタっていたが、巻き上げ残り数十メートルというところで数名の竿が突然突っ込み、跳ね上がる。

厄介者のサメの出現にやむなく移動。再び小田原沖の水深250メートル前後を3回流したところで13時に沖揚がりとなった。

●船宿information
相模湾小田原早川港
平安丸
☎0465-22-0676
(詳細は巻末の情報欄参照)

▶料金=根魚五目乗合一人9500円(エサ、水付き)
▶備考=12名限定予約乗合、5時半出船。
ほかヤリイカ、マダイ、アジ、イナダへも出船

小林 哲郎船長

船中釣果は、キンメがいい人で5枚、クロムツが同じく8尾。普段と比べるとやや低い釣果となったが、当地の深海釣りはこれから本番。

近場で狙える小田原早川港出船の根魚五目は深海釣りを手軽に楽しみたい人や入門者にイチ推しだ。



▲ハリのチモトにマシュマロボールなどの浮力アイテムを付けるのも効果的

●相模湾小田原早川港発 ↓小田原・真鶴沖 本誌ABC(東京) 権名義徳 Yoshinori Shimizu

深海の花形ターゲットに ライトタックルでトライ



▲マグネット板や水道管保温材を固定する養生テープをお忘れなく

知得! 投入をより確実に 行方アイデア

仕掛けの投入はハリを船べりに並べ、船長の合図でオモリを投じるスタイルだが、風が強い日は枝ス同士が絡んでしまい投入をミスしてしまうことも。当日乗船された寒川さん、鈴木さんは、船べりにマグネット板はもちろんだが、水道管保温材を船べりのタナに養生テープで取り付け、ハリ数分の切り込みをカッターで入れ、船べりから垂れ下がる枝スが風でなびかないよう狭み込んでいた。これにより枝ス同士が風で絡まる率がグッと下がり、確実に投入をこなすことができる。

1号船の舵を握る小林哲郎船長に何うと、
「竿はカツオ・キハダ用かヤリイカ用、リールはPE5、6号を50メートル以上巻けるクラスの電動リールだね。なければ50番(3000番)クラスの電動リールに、PE4号400メートルでもOK。ただし道糸が高切れするリスクもあるから予備リールや予備の長に何うと、
「竿はカツオ・キハダ用のリールの流用で道糸が太い場合は、念のため180、200号のオモリも持参し、状況で調整する」といい。

仕掛けは図のとおりだが、船宿仕掛けは今や珍しい松葉親子サルカンを使用した手作り品で、ハシゴタイプの仕掛け

道糸を用意できればなおいいね」とのこと。

また、カツオ・キハダ用のリールの流用で道糸が太い場合は、念のため180、200号のオモリも持参し、状況で調整する」といい。